

Title	阿片戦争に至るまでの英国の阿片貿易政策
Sub Title	
Author	長谷川, 次郎(Hasegawa, Jiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.97(361)- 98(362)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

發表要旨

東洋史専攻大学院生研究会

昭和四十四年十月二十二日 於南校舎大学院共同研究室

ムハンマド・アリーの政策

野村秀明

昭和四十四年十二月三日

「東洋とは何か」の問いかけの途上で——主として人権宣言を中心——

荒木稔江

西洋史学会例会

昭和四十四年十二月四日 於三田第一会議室

阿片戦争に至るまでの英国の阿片貿易政策

長谷川次郎

英国外交に関する一視点——ズデーデン問題をめぐって

藤原共代

昭和四十四年十二月十一日 於三田第一会議室

現代の歴史的思考について

雄上 統

統一に至るまでの旧ファランヘ党について

井上卓也

阿片戦争に至るまでの

英国の阿片貿易政策

長谷川次郎

阿片戦争について、これまで多くの史家（特に外交史家）は、その原因を主に对中国外交関係の対等化、中国の対外貿易に課せられた種々の制約の排除、在中國英国人に対する司法権の獲得などの一八世紀末の英国の欲求が爆発した結果であるとし、中国に対する阿片貿易と、その増大に伴う英中関係の緊張化に関しては、阿片戦争の原因としては副次的な意義しか置いて来なかつたと言つてよい。

しかしこれら外交史家の説は、当時英国が阿片戦争を開始するに当つて、英政府がその阿片貿易とその影響に関しては口をつぐんで言及せず、対議会工作、対世論工作として对中国外交関係の対等化などの問題を、ことさら強調したのをうのみにしたもので、受け入れ難い。

阿片戦争の主原因は、やはり英国の对中国阿片貿易そのものの中に、求められるべきものであり、特にその对中国阿片貿易独占を守るべく、一八二〇年代よりとられた一連の政策と、その結果としての阿片貿易量の著しい増大とに求められるべきものである。

る。

一八世紀を通じて、対中国阿片貿易において独占的地位を保ち、大きな利益をあげて来た英国は、一九世紀に入るや顯著となつたマルワ阿片の中国市場進出によつて打撃を受けた。マルワ阿片は印度非英国領地域で製造される阿片で、その製造、貿易に英国は一切関係する所なく、従つてその中国市場進出は、それまでの英国の中国阿片市場独占と、そのもたらす莫大な利益に対する挑戦者であつた。

この事態に直面して、英国はマルワ阿片を中国市場から駆逐すべく、多くの努力を払つたが、ことごとく失敗、ついにマルワ阿片の中国市場進出阻止を断念、むしろマルワ阿片を英国の対中国阿片貿易独占体制の中に組み入れてしまい、その貿易に英国自からが乗り出す事に決定した。

即ち一八三一年にボンベイからのマルワ阿片出荷を禁止していたのを撤回、これまで閉鎖していたボンベイへのルートを開放、マルワ阿片のボンベイでの集散を認めた。

結果英国の干渉を逃れるべく、輸送費のかかる迂回路を経て、ポルトガル領港に、そのマルワ阿片を運んでいた印度人阿片貿易商人は、輸送費が六分の一で済むボンベイ・ルートをとるようになり、一八三二年にはマルワ阿片の全生産量のほぼ全部が、ボンベイから英国の手によつて中国にもたらされるようになり、ここに英国は念願の対中国阿片貿易独占を回復するに到つた。

しかし独占は回復したものの、これまで英国によつて製造貿易

されていた阿片（ベンガル阿片）と、このマルワ阿片を合計すると、その貿易量はベルガル阿片のみの時のその二倍に達するもので、これは当時の中国の阿片消費能力を越すものであつた。英国は当初の利益を維持すべく、阿片の箱当たりの価格の低減を断行した。

この大量の阿片の価格低下は、直ちに中国の阿片消費人口の爆発的増大をもたらし、その需要増大は供給増大を、供給増大は価格低下を価格低下は又供給増大をもたらすという悪循環をくり返し、ために阿片戦争直前の一八三八年には、英国の対中国阿片貿易量は、一八一〇年代のその実に四倍、四〇、〇〇〇箱（一箱は一三三ポンド）を越すに到つた。

この激増する阿片貿易のため、銀の国外流出がはなはだしく、経済混乱をきたし、阿片吸飲習慣の普及のため、生産力は低下し、国力は疲弊して行く一方であつた中国は、阿片貿易の全面的禁止を行い、これの撤回を求める英国は阿片戦争を開始するに到つたのである。

この阿片戦争の直接的原因である、英国のマルワ阿片問題の処理の失敗とその結果としてのマルワ阿片に対する独占体制下への組み入れに関して、それを英国がせざるを得なかつた理由を、東印度会社と英本国の事情の内に求め、それを明らかにしたいと思う。

（本塾大学院文学研究科修士課程在学）